

生涯学習としての美術教育

——公開講座「楽しい色彩」の実践を通して——

茂 木 一 司*

(1990年7月1日 受理)

Art Education as a Lifelong Learning

—through the practice of the open class “Color Composition : Color Effects in Gestaltung” in Kagoshima University—

Kazuji MOGI

This paper is report on the results of the questionnaires on my open lecture, “Color Composition : Color Effects in Gestaltung” held in Kagoshima University in 1987-89.

The class, which was a ten-week course, met once a week, each for three hours. The class was given with the aim to improve the students sense of color : to have the adult students finally recognize the idea of color planning in the environments. The students learned at first the basic theory of color, PCCS (Practical Color Coordinate System) made by the Japan Color Research Institute, after that they created a color composition using “Tonal Color,” a colored paper developed on the basis of the PCCS theory. It was necessary that they should have a deep understanding of the basic theory of color. The results of the questionnaires showed that a large number of people wanted to learn the basic color composition for applications in oil painting, knitting, embroidery and many other hobbies.

In reality, today's art education especially color education in schools, including previously educated adults students, is ineffective. Therefore, I feel the study and practice of the basic theory of color and color composition is strongly required.

1 はじめに

「図工美術は、上手下手よりも、まず喜びの行為であることが第一に必要な条件である。そのためには、図工美術教師を含め、上手下手を越えて、かくことつくることの楽しさを教師自らが取り戻すことが大切である」、即ち「下手でもよい、遊びの心で」というのが、私の恩師高山正喜久先生の言葉であるが、これは図工美術教育に携わるものすべてが日常持っている気持ちであると思う。

また、最近ある美術教育雑誌の巻頭言の「美術教育のニュービジョン¹⁾」と題する一文が目に入ったが、そこにも「図画工作でも美術でも、“好き”になることが第一関門でありゴールでもあ

* 鹿児島大学教育学部美術科

ると考える」とあった。好きになれば子どもは指導助言がなくとも意欲的に取り組み、いやがおうでも創造的表現をしてしまう。しかし実際は、この教科が“楽しい教科”“好きな教科”と思っている人が少数である。教科としての美術あるいは学習としての美術は好きではなく活動としてだけ好きという反応は、私達美術教師が小学校、中学校を通して美術嫌いな人間を大量生産し、それによって、その子が親になり教師になりして、また美術嫌いを作っているかと思うとやりきれない。ここには「文部省のある課長さんの『美術教育とは美術を嫌いにする教育ですか、少なくとも私はそうでした』²⁾」という紹介が載っていたが、美術教育は従来の勉強は嫌いでも美術の時間は生き生きしている子に対応した教育ではなくて、上級職試験を目指すようなタイプの子どもに向けた教育に変わっていかねばならないということかもしれないが…。何はともあれ、明日の美術教育を考える時、その答えの中に「生涯教育としての美術教育」が含まれることは確かであると思う。それは図工美術教育が好きになって、自主的・自立的活動として、生涯継続していったらよいという希望を託した言葉であり、普通の人生きがいとして絵を描く姿や美術を日常生活の中で話題にする美術教育のユートピアであり、今日これからの美術教育を考える場合、大変タイムリーな表現であろう。それは、例えば社会教育審議会答申(1971)、中央教育審議会答申(1981)、臨時教育審議会答申(1986)から新教育課程(1989)へ至る道筋に示される。ちなみに生涯教育と生涯学習の違いは、臨教審概要にも示されるように、前者は学習者の主体性に重点を置くものと捉えられる。

本研究はそのような大きなテーマを前提に、私のつたない実践を3年間を区切りにまとめてみようというものである。この実践の動機は、基礎造形教育あるいはベーシックデザイン教育の観点において、大学生に課す美術教育(色彩教育)が一般の人にも有効かという単純なものであった。しかし、生涯教育に関連し問題を掘り下げ、その内容に通じてくるにしたがって、その重要性に対する認識が増し、美術教育も早くその議論(実践)に参加すべきと思い始めた。だから私は、今日この時点での美術教育の目的について、最終的な不満は残るが、一応「生涯学習としての美術教育」と言っておきたいと思う。

2 生涯教育と公開講座

周知のように生涯教育とは、1965年パリのユネスコ本部で開かれた成人教育推進国際委員会に提出されたポール・ラングランのワーキング・ペーパーによって提出された概念であり、わが国にはそこに参加した波多野完治によって紹介され、急速に広まったものである。総理府『生涯教育に関する調査』(1979)によれば、現代人は「人々が一生を通じて、必要なときに必要なことを学び、スポーツや芸術文化に親しむことは大切なことと思うか」の質問に対して、85%の人が「思う」と答えている³⁾。生涯教育の必要性については、①急速な技術革新と産業構造の変化、②教育爆発に伴う教育荒廃・教育危機、③余暇の増大などの要因が指摘され、生きがいの追求、職業能力の向上、家庭生活・老後の充実などが成人の学習目的として明確に出てきている。

人間が生涯にわたって学ぶという教育理論については、前述のラングランの「生涯教育論」(life-

long education) のほか、「すべての成人男女にいつでも定時制の成人教育を提供するだけでなく、学習、達成、人間的になることを目的とし、あらゆる制度がその目的の実現を志向するように価値の転換に成功した社会」と定義されるR. ハッチンスの「学習社会」、さらに「教育と労働の交錯と回帰、労働政策との関連を強調して、現在の公式的な教育体系が改革し、個人の全生涯にわたって教育と労働との交錯を原則として再構造化を強調する」OECDの一部局CERI（教育研究革新センター）の提唱する「リカレント教育」という三つの柱があり、それぞれアプローチの違いとして、実践を前提に検討されている。

生涯教育の意義・目的については、そのようにアプローチによって多様であろうが、意義に関しては、ラングランの①「人間存在をその全生涯を通じて、教育訓練を継続するのを助ける構造と方法を整えやすくすること」、②「各人を、彼が、いろいろな形態の自己教育によって、最大限に自己開発の固有の主体となり固有の手段となるよう整備させること」⁴⁾ という二本の柱が確認でき、また目的に関しては、中教審答申（1981）に見られるように「地域の文化創造」つまり「学校教育の延長でなく、人と人が触れ合い、知識や趣味を媒介として、互いに高めあっていく相互学習」が一般論として承認される。それは人間が一生学び続けねばならない存在であるとか、死ぬまで勉強しなければならないという暗く重い教育論でなく、コミュニケーションが作る社会の理想を唱っている。

以上のような生涯教育の全体像の中で、大学は非常に重要な役割を担っていることが承認されている。大学の生涯教育化は、現在「大学の解放」として文部省によって進められており、その種類は社会人入学、夜間学部、聴講（研究）生制度とこの公開講座によって成り立っている。しかし、制度面の改善とは裏腹に、これらに対する取り組みは必ずしも十分とはいえない。それは、大学特に国立大学の場合に顕著であるが、大学の自治と関わる民間との接触を極度に嫌う体質とともに、大学教員の保守化または無関心が大きな要因となっていることは否めない。ユネスコは1977年「大学をいかにして成人にも解放して生涯教育機関たらしめるか」をテーマとした「生涯教育を大学活動の正規の一部たらしめることに関する専門委員会」の会議を開催し、14名の専門家によって、この問題を①生涯教育が大学に取り入れられると、学生の多くは成人となるので、カリキュラム、教授法、組織、管理、単位認定など多くの面で改革が必要となる、②生涯教育への責任を大学が持つべきことは会議で広く承認されたが、そのため新しい高等教育機関を設立する方がより有効ではないかという意見が先進国の委員に多かった、③生涯教育を大学に取り入れる場合、大学は社会の要請を十分評価すべきであり、定型的な教育と非定型的な教育、一般教育と専門教育との伝統的区別を除去しなくてはならない、とさらに、④生涯教育への理解が教員の間に乏しいので、大学教員の養成、就職契約などにこの問題を織り込み、特に成人教育について教養を得させねばならぬと指摘し、まとめている⁵⁾。大学は言うまでもなく、地域唯一の最大最高の学術情報のセンターであり、質的・量的教育財産の宝庫である。無批判・無差別な解放は論外だが、こうした大学の持つ教育的財産や教育機能を広く社会に解放することは、社会的要求などから今や緊要な課題となっており、

それによって大学はまさに生涯教育の中核的存在になるのであり、大学解放の内容、方法がより具体的に検討されねばならない段階にきている。それは①施設、設備の解放、②成人のリカレント教育の推進、③そのための学習方法の改善、④指導者の養成、そして⑤大学公開講座の量的・質的整備ということである。

大学等における公開講座（以下、公開講座と略）とは、大学等の学術研究・教育の成果を直接社会に解放し、地域住民・社会一般に学習機会を提供するものである。公開講座の現況を見ると、講座数では国公立合わせて、

●表1 大学公開講座の実施状況

2,511講座（昭和61年度）

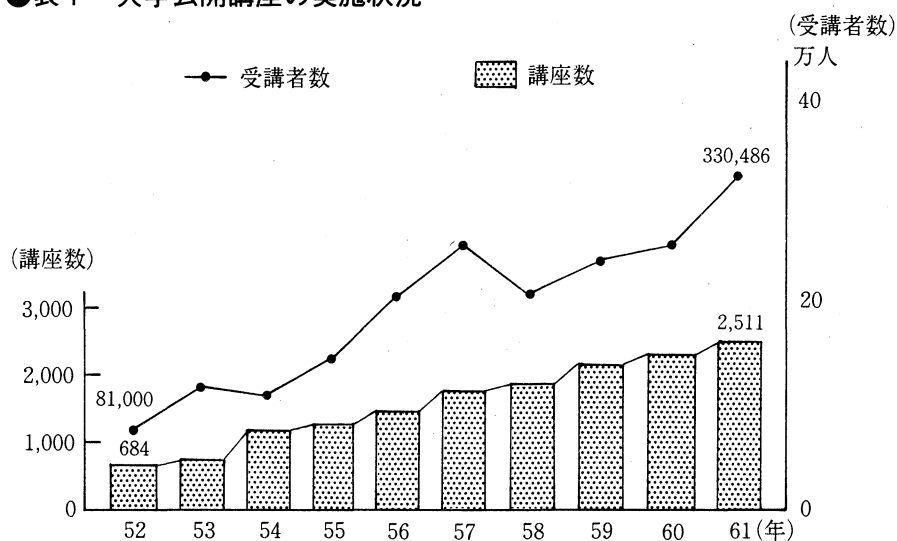
であり、52年度と比べると約3.7倍に増加している。

また参加者は、8万人から33万人に上っている（表1）。講座の内容

は一般教養、語学のほか専門的な内容からスポーツまで様々であり、職業

能力向上の講座は1割程度であり、大部分が趣味

等に関するものになっている。



3 公開講座「楽しい色彩」のアンケート調査結果

公開講座は、「色彩の基礎理論と構成実習を通して、色彩についての知的な理解を深めるとともに、色彩感覚の向上をはかる」ことを目的に、時間を週3時間を連続10週間、定員30名、年齢・学歴等受講資格は特に問わないというものである。内容は著者が専門にしている色彩構成を基礎造形教育としてカリキュラム化したものであり、学生時代に学んだ横山智也先生（現秋田大学）のものをもとにしている。学習方法は、簡単に述べると、日本色彩研究所（以下、日本色研と略）の表色体系PCCS（Practical Color Coordinate System）の表とカード及びトータルカラーの色紙を使って、課題にしたがって平面構成をしていくというものである。

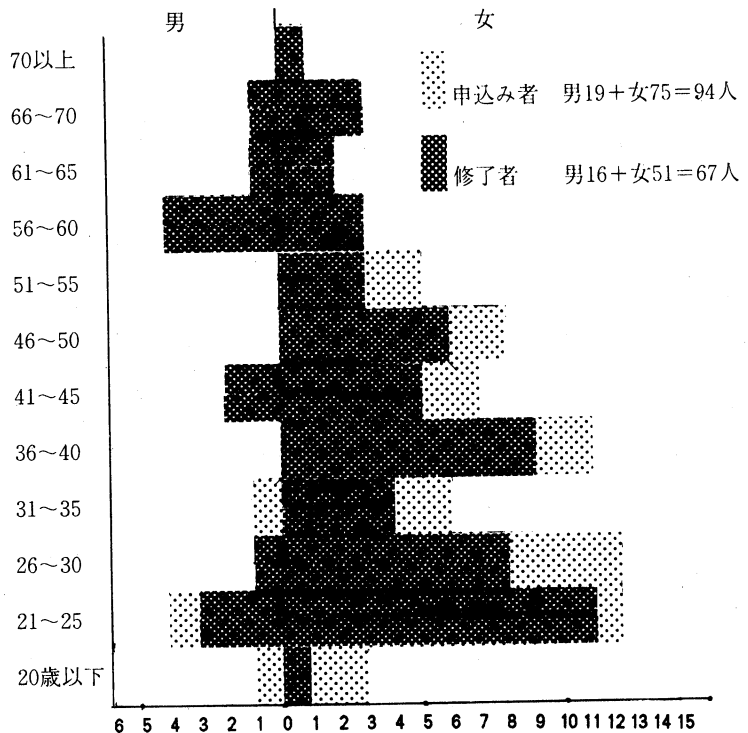
(1) 受講者（調査対象者）の基本属性

講座の受講申込者は94人、そのうち修了者が67人であり、女性の受講者が圧倒的に多い。年齢では、20代前半、30代後半から40代、そして60代にピークがみられる。男性は定年後に多いというのは納得できる結果である。婦人の学習への取り組みの積極性については、民間のカルチャーセンターの受講者の8割が女性であることから理解されるが、この要因には①余暇時間の拡大、②経済的

余裕、③高学歴化などが指摘されている。しかし一方で量的には極大に差しかかっていると言われる婦人の生涯学習は、①学習意欲は高く、活動も活発であるが、多くの場合自己満足だけで終わってしまう、②自己中心的で、社会的発展に欠ける場合が少なくないなど問題点も指摘されている。

学歴は短大卒以上が61%と高学歴を示し、職業は種々雑多である。著者の期待としては、幼稚園、保育所をはじめとする教育関係者特に小中学校の教員の受講を多く望んでいたが、現実には3名という結果であった。なお、職業の詳細も以下に示す。

●表2 受講申込み者・修了者年齢別構成表



(2) 受講の動機など

「講座を何で知ったか」という生涯学習にとって重要な情報源の問題は、普通このような講座で

●表3 最終学歴

人 (%)			
a 高校 (旧制中学を含む) 20 (30)	b 短大 (高専を含む) 17 (25)	c 大学 24 (36)	d その他 5 (7)

●表4 職業

- 教員関係 (保母1人, 小学校教諭1人, 中学美術教諭1人, 高校教諭: 家政被服科4人, 大学工学部建築学科助教授1人)
- 公務員 (選挙管理委員会1人, 学校事務2人, 福祉事務所2人, 県庁事務1人, 市役所事務1人)
- 会社員 (ブテック店員1人, 証券会社1人, 広告代理店1人, 県観光連盟1人, 織物会社製図科1人, NHK: テレビ画面デザイン1人, 写植オペレーター1人, 経理事務1人, 農業共済事務1人, 舟具商会事務1人, コンクリート会社事務1人, デパート店員1人, 銀行員1人, 住宅設計1人, 法律事務1人, NTT1人, 化粧品販売1人)
- 自営 (画材店1人, 酒店1人, 将棋センター1人)
- その他 (編物教師2人, 陶藝家1人, 理学療法士1人)
- 無職 (主婦24人, 家事手伝い5人, 定年退職者7人, 無職1人)
- 学生 (鹿児島大学教育学部美術科5人, 同法文学部2人, 同工学部1人, 同水産学部1人, 女子短大1人, 浪人生1人, 通信教育: 美術系短大1人)

は知人や仲間から聞く、市町村を越えない範囲での広報誌などによるところが大半であるのに比べて、新聞が半数を占めた。これは、大学の情報が地域に流れにくいことを示している。

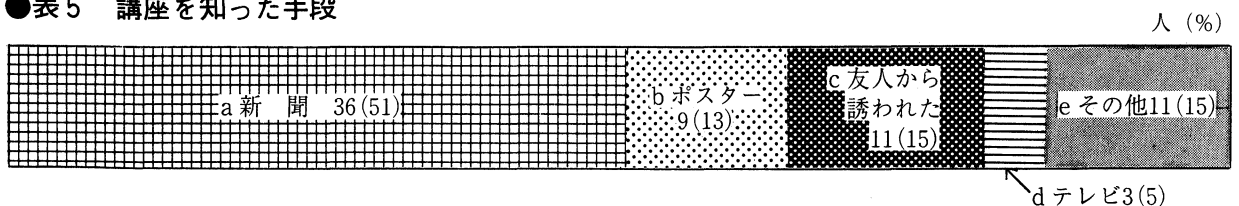
受講の動機で一番多かったのは、日常生活で役に立つ（ファッション、インテリアなど）で、一般教養と合わせると約半数になる。これは、受講者が色と日常生活の深い関わりを実感していることを示している。それから、油絵のためというのも多く、またこの講座で初めて気づいたのであるが、編物や刺繍という趣味が婦人の間で根強い人気を持つことを知った。また、興味深く感じた内容に、大学で勉強してみたかったというのがあった。大衆化したといわれる大学もまだ地域の人々にとっては、最高学府であり、それだけ閉鎖的であるということか。この他にも、なんとなく過ぎていく日常生活にけじめをつけるなどというものもあった。

本講座の受講生は、以前または現在他にも講座を受講しているもののがかなりおり、造形・美術に関するものに限っての調査であったが、様々な学習が体験されていることがわかる。

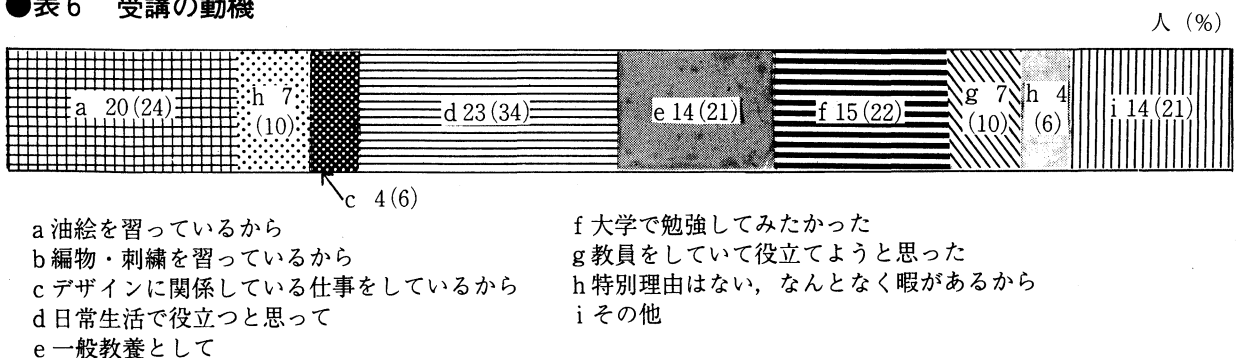
「他の講座に比べて楽しいか」の質問に対しては、46%の人が「大変楽しい」と答えており、問題意識を持って臨んでいる人の多いことを示している。理由として、興味がある講座であること、実習を伴うからなどは複数回答があり、また、本講座の主旨である「造形の基礎・基本」を学ぶという、色彩の理論的・体系的理解ができたという、うれしい回答もあった。さらに、美術の講座は他にもかなりあるが、色彩だけの講座はほとんどなく、この面の要求の高いことを示している。

生涯学習にとって重要な役割を果たすのが家族の理解である。本講座の受講者の約半数が積極的な理解があり、どちらでもないを合わせると、ほとんどの人が否定的でないといえる。積極的な理解の理由としては、夫婦がともにお互いの才能、個性を尊重し、認め合い、励まし合うというものや親子がこの講座を共通の話題にして団らんを過ごすといった読んでいて本当に講座をやってよかったと思う心温まる内容のものが多かった。ただ、どちらでもない理由の中に、高齢になるとなかなか身につかないこと、主婦が子育てによって学習を中断せざるを得ないこと、また家族が互いの生活に無関心であったり、放任であったりと現実には問題点もまだまだ多い。

●表5 講座を知った手段



●表6 受講の動機



●表7 その他の受講したことがある（している）美術やデザインの講座

a. 公的な機関主催のもの

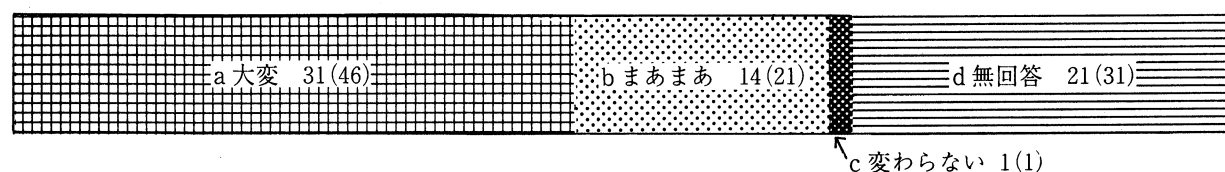
講座名	内 容
公民館市民講座	油絵, 日本画, 版画
市立美術館市民講座	〃, 水墨画, 〃
〃 友の会講座	
高校成人講座	〃

b. 民間主催のもの

画材店美術教室	油絵, クロッキー, パステル画
MBC学園	イラスト, ファッション画, 皮工芸
デパート文化教室	粘土細工, 油絵
個人教室	彫塑, 陶芸
公募展研究会	陶芸

●表8 他の講座と較べて楽しい

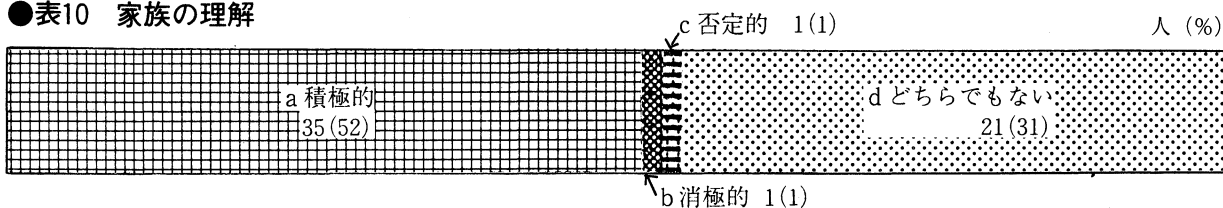
人 (%)



●表9 (他の講座と較べて楽しい) 理由

- ・興味がある内容の講座だから (3人)
- ・なんとなく知っていたことがらが, 確かな知識になるから
- ・話だけでなく, 実習であるから (4人)
- ・デザインを勉強する上で基礎となると思ったから
- ・色彩を理論的・大系的に勉強できたから→それによって色の選択に自信ができたから
- ・心休まる時間だから
- ・自分の全てを何の制約を受けず, さらけ出せる時間だから
- ・配色や絵を描くことが (成功, 失敗, 上手, 下手) に関わらず好きだから
- ・色の用語は耳からだけは聞いて知っていても, その実証が知り得ないままでしたが, 課題が重なる事に具象として除かれ始めました。いままで知らない事柄とその難しさに少しではありますが, 「ああ, そうなのか」との思いから, 楽しさがございました。
- ・色を手に行っていると豊かな気持ちになる。
- ・ほとんど色のない生活をしているので, 論理的に難しい面もあるが, 反面私の遊び心, 空想なども膨らますこともできるし, 頭の体操になる。
- ・自分にとって, 目新しい未知のものであるため
- ・色彩の単独の講座は初めてだから

●表10 家族の理解



●表11 (家族の理解) 理由

a 積極的な理由

夫の協力と勧め

- ・主婦ですので時間帯に無理がありましたが、夫は私の帰宅時間に合わせてくれます。
- ・主人がお金の貯蓄ではなく、精神のゆとり、才能を生かす方向をすすめてくれる。
- ・夜、家を開けたことのない私を主人が快く賛成してくれました。
- ・学習するチャンスをつかんだら、私がやるというとはほとんどの場合実行できます。夫は車で迎えに来るといつももうしますが、雨が降るとき以外は自転車で通うことにしました。誰も反対するものはおりません。
- ・主人が油絵を励まし、アドバイザーである。

妻の励まし

- ・妻が衣類、家具等の配色に非常に参考になっているようだ。
- ・趣味で習っている油絵の手助けになるのでは？生活の中での色の使い方、身につけるもの、室内の統一などの理由で妻が賛成。

母親が賛成

- ・すてきな花がいけられたらと母が賛成だった。
- ・今日はどんなことを学んだかということをよく聞いてくれる。自宅でトータルカラーを眺めていると色の組合せなど、アドバイスしてくれる。その他の家族、家族全員の賛成。
- ・娘も独立して、これからの生き方に張りを持つためにはと、家族揃って応援してくれます。
- ・父が建築設計士であり、内装外装において色彩は重要であるという理由で。
- ・自由にやりたいという気持ちを皆が賛成してくれる。
- ・技術や感覚を養うことは役に立つと姉が励まし、何でも好きなことはやるように協力してくれる。
- ・何でもよいから、勉強はいいことだと母も姉も別居している祖母も思っている。
- ・家族ともに陶芸（白薩摩の絵付け）に興味を持つ。子供たちも幼少より絵画に興味を持っている。
- ・夫も子供も私が学ぶことにより、生活に張りができ、生き生きとしてきたことを喜び、また子供たちは、共に学生同志という共通意識を持ち合え、共通話題も多くなったことを喜んでいる。

b 消極的な理由

- ・帰宅が遅くなるため母は心配するが、向上心を持つことはよいことだといってくれる。

c 否定的な理由

- ・父は働くこと以外は無駄と見なす。

d どちらもでない理由

- ・高齢になるとなかなかいろいろのことが身につかないことと、また継続して学ぶことの難しさを知っているため。
- ・子育て中であり、週1回の外出が限度である。
- ・何でもつつき散らして、取り留めもないと（家族）全員考えている。
- ・私のやっていることに余り関心がないから。

- ・余り興味は示さなかったが、ためになるのと祖母が講座費を出してくれた。
- ・（家族は）知らせてない、よく知らない。
- ・家族は忙しくて無関心。
- ・放任主義なので。
- ・家族の誰であれ、それぞれの好きなことをするのは当然であって、他の家族に特に負担にならないことでない限り、別に理解を求めようと思わないし、また求められもしない。

(3) 余暇感・趣味感

生涯学習においては、それが余暇活動に関連している場合が多く、受講者の余暇感・趣味感も重要と思われる。余暇の定義については、休息、気晴らし、自己開発の三つの機能が一般的であるが、休息や気晴らしでは自己のアイデンティティーは確立されない。最終的には、自己実現に至るための自己開発が必要である。そのための余暇計画の立案に必要な条件をアイオワ大学老年研究所では、①ある程度、社会の役に立つこと、②地域社会の一員として認められること、③友達付き合いを楽しむこと、④個人として認められること、⑤自己表現の機会と達成感を得られること、⑥健康管理と医療の心配がないこと、⑦適当な精神的刺激があること、⑧適当な生活環境と家庭生活に恵まれていること、⑨精神的満足が得られること、などを指標としてあげている⁶⁾。このような生き方を可能にするのは、もちろん老後の金銭的な後付けいわゆる福祉国家の確立が不可欠であるが、現在の日本のように定年後までびっしり会社のためだけに働く会社人間では対応しきれない。それは、余暇を青年期からフルに活用して自分自身を設計していく能動的な人間であり、パブリック（会社）とプライベート（私生活）の二元的生活をし、出世を考えずのんびりやっていく悠々自適化のライフスタイルが多くの人々に向いているという指摘（森本哲郎「二足の草鞋のすすめ」）がある⁷⁾が、このようなことはアンケートの結果と一致する。受講者のうち、本講座を余暇活動として受講しているものが約半数。余暇ではなく、仕事のために受講しているものが若干名であり、人生観では家族を大切に、仕事もレジャーもどちらも一生懸命楽しみ、そして金や名誉を考えず、自分の趣味にあった暮しをする人々の姿が浮かんでくる。

また受講者の自由時間はかなり多い。自由時間の使い方では、趣味、スポーツ、お稽古事が大半を占め、普通が一番多いはずの休養などが少なくなっている。他には、仕事の準備、家族の世話、ボランティアなどがあつた。趣味そのものでは、読書、絵画、音楽（鑑賞、演奏）、手芸が多かった。

趣味にかかるお金に関する質問では、好きなものに幾らでもお金をかけるという反面、実際は2万円以下が6割を占め、堅実さが現れている。

最後に美術が趣味かの質問には、66%の人がはいと答えている。

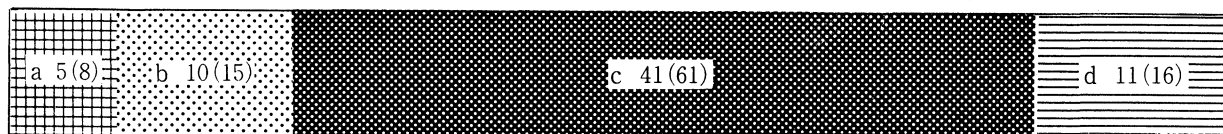
●表11 この講座を自分の余暇活動として受講している

人 (%)

a はい 31 (16)	b いいえ 7 (10)	c どちらでもない 24 (36)
--------------	--------------	-------------------

●表12 自分の人生観に一番近いもの

人 (%)



a 仕事が一番の生きがいだ

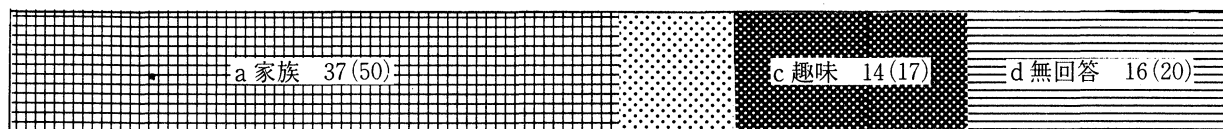
c 仕事も大切だがレジャーも楽しみたい41 (61)

b 余暇を楽しむために仕事をしている

d 無回答

●表13 いま一番大切なものは

人 (%)



a 家族

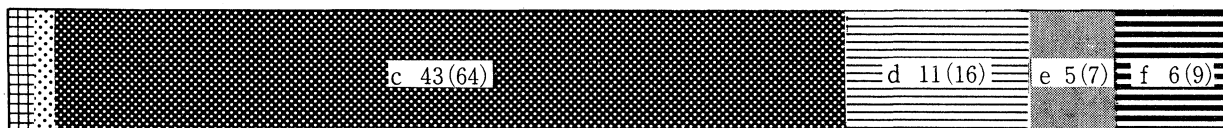
c 趣味

d 無回答

b 仕事 7 (9)

●表14 一番あなたの気持ちに近いもの

人 (%)



↑ b 1 (2)

a 1 (2)

c 金や名誉を考えず、自分の趣味にあった暮しをする

d その日その日をのんきに、くよくよしないで暮らす

e 世の中の正しくないことを押し退けて、どこまでも清く正しく暮らす

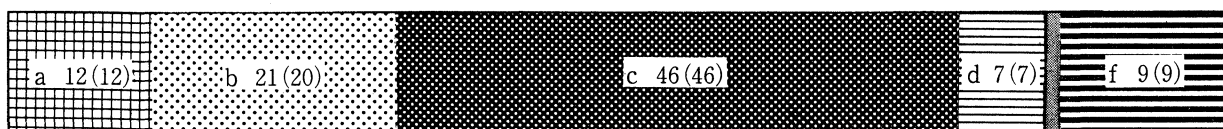
f 無回答

a 一生懸命働いて金持ちになる

b まじめに勉強して、名をあげる

●表15 余暇観

人 (%)



a 仕事の疲れやすい

d 仕事に役立つ知識を得るため

b 教養を高める

e 家族サービス

c 好きなこと (趣味・道楽) を楽しむため

f 仕事の活力を養う

↑ e 1 (1)

●表16 生きがいとは

人 (%)



a 家庭の建設や子供の成長にいそしむ

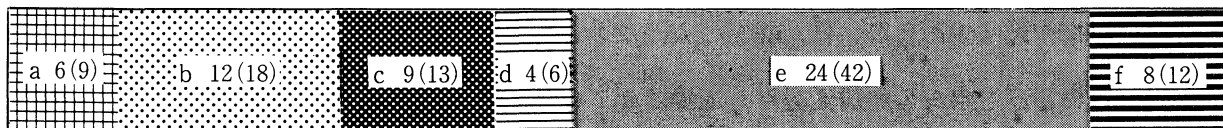
c 仕事をしている

b 趣味・娯楽で余暇を楽しむ

d 格別、生きがいを感じずようなものはない

●表17 自由時間 (1週間)

人 (%)



a 10時間未満

d 30～39時間

b 10～19時間

e 40時間以上

c 20～29時間

f 無回答

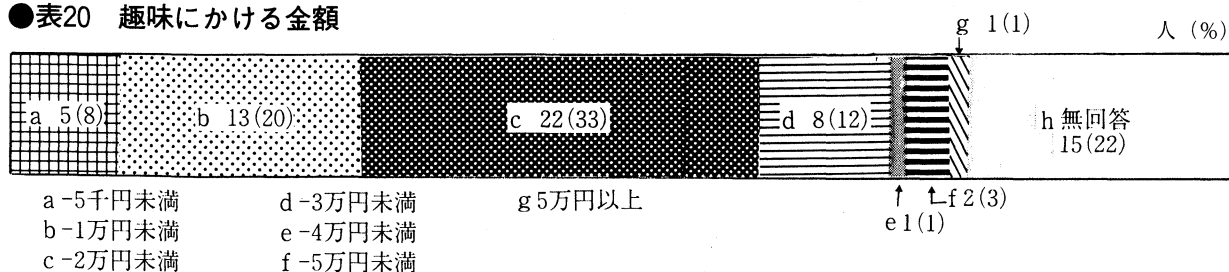
●表18 自由時間の使い方

- ・趣味（読書、音楽鑑賞、絵画、囲碁、編みもの、俳句、作文、刺繍、洋蘭の管理栽培、絵画鑑賞、ピアノ、パッチワーク、和裁、手芸、パソコン、テレビ、ラジオ、植物画、映画、ビデオ、デザイン、生け花、工作、洋裁、電話、手紙、新聞、エレクトーンなど）
- ・スポーツ（サイクリング、散歩、バイクなど）
- ・ボランティア
- ・家族の世話・家事
- ・勉強、お稽古事（中国語などの語学、料理教室、沖縄に関する研究）
- ・仕事の準備
- ・その他（睡眠、なんとなく）

●表19 あなたの趣味の中でする頻度の多い順

- 1位 読書10人、油絵6人、ピアノ3人、音楽鑑賞3人、手芸2人、英会話2人、生け花2人、ヨガ、洋蘭の世話、芝居鑑賞、日本画、水墨画各1人
- 2位 油絵6人、音楽鑑賞4人、料理3人、刺繍3人、読書3人、瞑想、手紙、ウインドサーフィン、俳句、ペン習字、テニス、書道、囲碁各1人
- 3位 読書4人、音楽鑑賞2人、油絵、生け花、茶道、テニス、ボランティア、園芸、ピアノ各1人

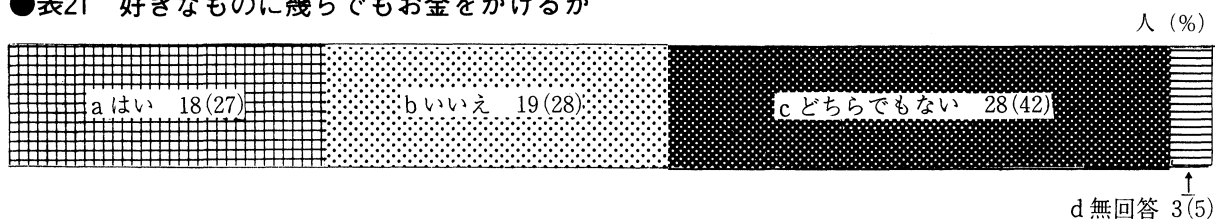
●表20 趣味にかかる金額



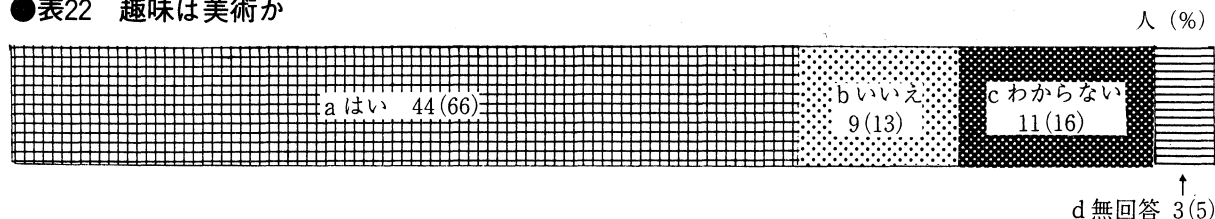
(4) 体験した「美術」・「美術教育」

受講者のほとんどが、美術とよい接触をしてきて、幼児期以来ずっと好きで、成績もよい方であり、現在も85%の人が美術が好きで、絵を描くことについても約6割の人が好きという結果が出ている。美術を好きである理由については様々であるが、上手下手で好き嫌いという一般にみられる才能論のような傾向があまりみられず、とにかく美術を（制作・鑑賞）すること自体が楽しくやりがいがある、つまり「美術そのものが好き」という本質的な答えが多かった。ここに集う人は、美術を通じて（自己を含めた）何かを見つめ（求め）ていることは確かであろう。それは、美術によって、ストレスから解放され元気が出るから、精神的豊かさを作り上げる、自分の人生観・生き方に大きく関わってくるからまで、それぞれの答え方にはそれぞれの個性における真剣さ、真実が読み取れるからである。（詳細は、表23から表32を参照。「美術の定義」他は省略）

●表21 好きなものに幾らでもお金をかけるか



●表22 趣味は美術か



●表23 あなたの図工（または美術）に対する「好き」「嫌い」とその成績の変遷

a 好き嫌い

	○	△	×	無回	理 由 ・ 原 因
幼児期	26	11	1	20	○ぬり絵をよくしていた・一人遊びをよくしていた・父の仕事の影響・ 展覧会に出してもらった・クレヨンが好きだった
小学低	33	17	2	14	○間違った描き方というものがなく、授業は楽しく集中して絵がかけた・ 先生に木版をほめられた・コンクールに入選した・絵画教室に通って いた・活動そのものが楽しい・クラブで桜島を描くのが好きだった・ 学校のデザイン大会で入賞・
小学中	37	17	2	13	△受験勉強が忙しくなった・クラスに飛び抜けてうまい子がいた・遊び に夢中だった
小学高	39	12	1	12	
中学1	42	11	0	11	○魚一尾の鱗を上手に描いて先生にほめられた・他のことを忘れられた から・美術の先生が尊敬できた・テレビアニメのポスターにひかれた・ 海が側でしぜんに親しめ、のびのび絵をかけた・先生がすばらしかった
中学2	39	13	1	12	△部活が忙しい・親がいい顔しなかった
中学3	37	14	1	12	×教科書中心の授業でおもしろくなかった
高校1	33	11	0	18	○時間は少なかったけど、授業内容がおもしろかった・美術館に行くの が楽しみだった・勝手に好きなことをさせてくれたから
高校2	28	8	0	24	△日常生活の活性化
高校3	26	8	1	24	
浪人	2	2	0	47	
大学1	16	5	0	3	
大学2	16	5	0	31	
大学3	14	2	0	33	
大学4	12	2	0	38	

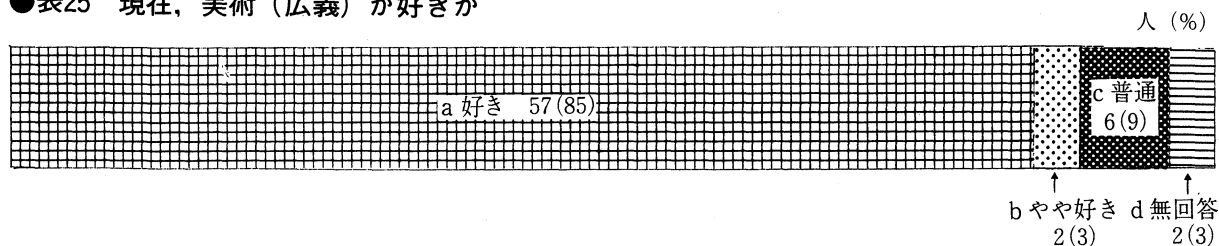
b 成 績

	○	△	×	無回	理 由 ・ 原 因
幼児期	0	0	0	0	○作品作りに夢中になっていた・スケッチをまめにかいていた・絵の中に浸ることができた・提出物は忘れないなど、まじめな生徒だったし、 図画コンクールなどにも良く入選していた・ △自由に表現することが苦手だった ×好きでよく描いていたが下手だった
小学低	18	13	0	12	
小学中	21	10	0	12	
小学高	24	12	0	12	
中学1	23	7	0	12	○絵の中に浸ることができた・絵が上手だった・筆記試験が良かった ×絵で形はともかく色使いが苦手だった
中学2	22	9	1	12	
中学3	21	10	0	12	
高校1	12	7	0	20	○授業が楽しかった・クロッキーやデッサンが多少うまかった・5段階評価がなかった ×先生が嫌い
高校2	9	6	0	23	
高校3	8	5	0	23	
浪 人	0	0	0	0	
大学1	3	1	0	19	
大学2	3	1	0	19	
大学3	1	3	0	20	
大学4	1	3	0	20	

●表24 好きな教科の順に番号を書いてください

	国語	算数	社会	理科	体育	音楽	美術	技術家庭	英語	無回答
1 位	15	5	3	1	2	5	19	4	4	2
2	8	1	8	4	7	9	8	6	5	2
3	10	8	7	5	2	10	13	2	5	3
4	6	2	10	4	5	5	6	4	7	4
5	8	5	5	7	3	5	3	9	5	5
6	3	4	7	7	7	4	4	11	6	5
7	3	3	4	12	7	3	2	6	8	5
8	1	9	9	9	7	2	2	8	5	5
9	1	10	2	3	13	5	0	5	6	9
合計	369	199	285	220	209	269	403	247	242	
順位	2 位	9 位	3 位	7 位	8 位	4 位	1 位	5 位	6 位	

●表25 現在、美術（広義）が好きか

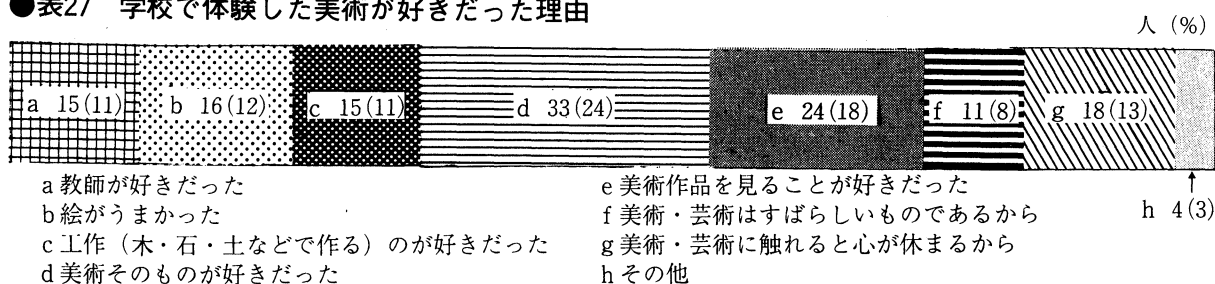


●表26 (美術が好きな) 理由

a 好きの理由

- ・(制作・鑑賞が) そのものが、楽しい。やること自体が楽しい
- ・() 心が休まる、やわらぐ
- ・熱中できる
- ・精神的豊かさを作り上げる
- ・ストレスも消える。元気が出る
- ・美しいから・美に通ずるから。心に響く美しさ、強さがある
- ・自分の感性を生かせるから
- ・自他の個性を見ることができる
- ・創造することが好きだ
- ・周囲との関係にすばらしい出会いがある
- ・好きなものを自分なりに表現できるから
- ・すぐに形として現れるから、充実感がある
- ・自由に視覚的に語れるから
- ・意義・やりがいがあるから
- ・美術の勉強がファッション、インテリアなどの日常生活の中の色彩に関することが楽しみになってくる
- ・自分の人生観、生き方に大きく関わっているから
- ・第2の人生における挑戦のため
- ・昔(幼い頃)から好きだった
- ・私の幼児期から社会に出るまでファシズムの嵐に吹きさらされた時代で非常に不幸なときでしたから、芸術一般が否定されていました。14歳の時に油絵の具を買ったときには、もう配給という制度が近づき、まもなくジンクホワイトなど軍の協力者でないと入手できないようになりました。今はあんな時代を繰り返したくないからです。

●表27 学校で体験した美術が好きだった理由



●表28 美術の授業中で好きだった分野

好きな順位	1位	2位	3位	4位	5位	6位	総計	
絵画	33	3	1	6	1	1	236	1位
版画	1	10	7	5	6	4	115	4位
彫塑	2	4	9	8	0	6	98	6位
デザイン	0	5	9	5	14	3	107	5位
工作・工芸	9	8	7	6	4	3	151	2位
鑑賞	3	12	7	2	0	12	124	3位

絵画：クロッキー 4人(6%) デッサン 2人(3%) 水彩画 10人(15%) 油絵 19人(28%) 風景画 5人(7%) 人物画 5人(7%) 静物画 3人(4%) 空想画 2人(3%) 抽象画 0人(0%) その他 0人(0%) 計 35人(52%)	彫塑：塑像 3人(4%) 石膏のじか付け 0 木彫 4人(6%) 針金彫刻 0 レリーフ 0 モビール 0 その他 0 計 7人(10%)	版画：木版 2人(3%) 紙版 0 エッチング 1人(1%) ドライポイント 0 シルクスクリーン 1 芋版 0 その他 0 計 4人(6%)
デザイン：平面構成 1人(1%) 立体構成 0 ポスター 5人(7%) ラスト 2人(3%) アニメ 0 マンガ 0 その他 0 計 8人(12%)	工作：紙の工作 1人(1%) 工芸・木工 4人(6%) 陶芸 2人(3%) 金工 1人(1%) 動くおもちゃ 2人(3%) パズル 0 皮革工芸 1人(1%) その他 0 計 11人(16%)	鑑賞：絵画鑑賞 7人(10%) 仏像鑑賞 5人(7%) デザインの鑑賞 3人(4%) その他 0 計 15人(22%)

●表29 美術の授業で特に印象が深いこと

小学校時代

- ・小学校1年の時の読書感想画を描いたこと。
- ・小学校高学年の時に「生活デザインクラブ」で1m×1.5m程度のベニア板に水彩絵の具を使って3～5人のグループで絵を描いた。
- ・陶芸で小物作品作った。マリオネットを作った。

中学校時代

- ・ブロンズで作ったお面。
- ・中学の初めの頃、魚の絵と木々の冬景色の絵が美術教室に貼られていることを誇らしく思った。

- ・孤独であるはずの（絵画の）製作をグループで仕上げたこと（ピカソの絵を分割した）。
- ・1枚の板を渡されて何でも作ってよいといわれた。状差しのようなものを作ったが、自分で作ったにしては気に入ったものができた。今でも使っている。
- ・13歳の時の図画の先生が、セザンヌの言葉として教えてくださった言葉「あなたの師は自然です。自然を師としなさい。
- ・卒業記念にみんなでタイムカプセルを作ったとき（土煉瓦に自由にレリーフ）。
- ・附属中時代に大学の研究室で彫塑の実技を受けたこと。
- ・パレットに全ての色を少しずつ出して使うようにと指導された。
- ・中3の時に市立美術館が開館し、そのとき初めて黒田清輝の作品を見て、今でも鮮明に残っている。

高校時代

- ・美術の時間に風景画を描いた。
- ・ペン画の授業で先生がBGMを流してくれた。
- ・中学時代は理論的なことばかりやっていて高校時代デッサン、空想画、風景画、などを描いたときはすべて楽しかった。
- ・石膏デッサン

大学時代

- ・大学（日本女子大）で、アクリル板にコールタール（黒）をぬってあるところを引っかいたりして、油絵の具を塗り、黒とのバランスで作り出す絵。
- ・大学時代、塑像の「首」を作り、中村先生の指導を受けたこと。その後5～6人で美術に関して、フリートークキングをしている。

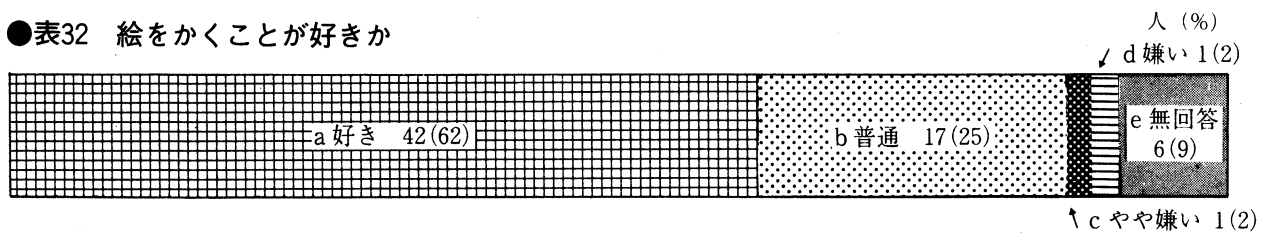
●表30 「美術」という言葉で何を思い浮かべるか

- ・美術ジャンル（絵画・彫塑の純粹美術、絵画、彫塑、工芸、鑑賞、絵画、デッサン、展覧会、美術館）
- ・作品、作者など（アルタミラ壁画、古代の壁画、ミロのビーナス、ピカソ、ルネッサンス、広重、ダビンチやミケランジェロの作品）
- ・画材（水と墨、色、絵の具、筆）
- ・言葉（美、美的感覚、気むずかしい、表現、時、多面的、制作、勉強、エネルギー、解放感、個性、文化、難しい美術評論などの並ぶ学問、孤独、主張、自己主張、伝統、技、楽しい、ひとり遊び、感性、戦争と平和と愛）
- ・その他（色彩によりさまざまなことを表現する、美しいきれいな色）

●表31 「造形」という言葉で何を思い浮かべるか

- ・美術ジャンル（工作、デザイン、立体的なフォルム、彫刻、陶芸、建築、絵画、オブジェ、紙の工作、木工芸品）
- ・作品、作者など（岡本太郎の太陽の塔、アントニオ・ガウディー、ロダンの考える人、仏像、天空を見上げるブロンズ像、小さい頃百科事典でみたダムの写真、高層ビル）
- ・画材（石膏像）
- ・言葉（立体感、強い意志を持った主張、無彩色の響き、力躍動、静止、曲線、リズム、直線、曲線の交差のイメージ、その人の文化）

●表32 絵をかくことが好きか



(5) 「色彩」「色彩教育」について

「色彩」をテーマとする講座であるので、過去に受けた色彩教育や色彩に対する意識などについて尋ねてみた。まず、「色彩を学ぶことは必要だと思うか」の質問に9割近い人が「強く思う」と答えている。理由としては、①色そのものが持つ力のようなもの。例えば感情、情操、精神に強く影響を与えたり、色は言葉であり、コミュニケーションに役立つなどである。②美術・手芸などの作品作りに必要だから。③自分の色彩感覚を磨くため。④生活に役立て、豊かにするため。ファッション、インテリア、建築、食器などの色の選択とその調和、さらに子どもの食欲をそそるために、弁当の色彩を考えるためなど。⑤社会、環境の色彩への問題提議、改革。これは、個人のレベルを越えて、色彩の調和が人間生活に及ぼす影響を強く意識した意見として重要である。色は人間の感情の表現であり、その調和とは人間どうしの心の調和であるはずである。⑥その他、「幸せなことに目が見え、色盲でないため、色から受ける感動が自然の中、周囲にあふれるほど（色が）あったのに今まで意識せず受け入れるのみだったため」という理由もあった。美術教育に携わるものとして、反省させられた。

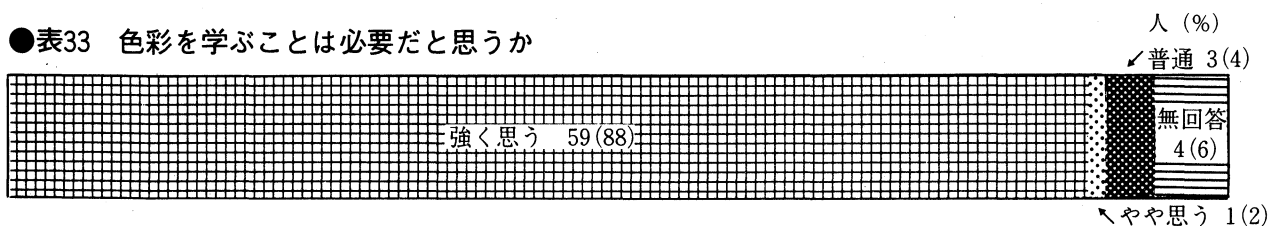
過去に受けた色彩教育の満足度については、小学校でわずかに満足のものがあるといった程度で、ほとんどが不満足か普通というものである。理由から察すると、「色彩教育を受けた覚えがない」というのが正直なところではないだろうか。不満足の理由を拾い出してみると、「人の顔は肌色、空は青、という感じ（幼稚園）」、「実習ばかりで理論は覚えていない（中学校）」、「（絵を描くとき）ぜんぶ灰色を混ぜなさいといわれた（中学校）」、「色彩ができる教師がいなかった（学校教育全般）」、また印象的なのが「戦争で色彩がなかった」というものである。国防色の時代に青春を過ごしてしまった世代は、色彩に関してはかなり特殊な人になってしまったようである。

色彩教育の代表的な指導事項である系統色名の指導と透明水彩の混色の教育体験については、どちらもない、わからないが同数程度であり、年齢を見ていないが、受けた教育（年代）による差があると思われる。

「日頃色について気をつける方か」の質問に対しては、「大変気をつける」が36%、「普通」が46%であり、これは高い数値であると思われる。例えば、環境問題としての色彩に関する質問において、日本の都市の色彩について、（よくないという意味で）66%の人が「普通」と答え、色彩計画を施されて計画された鹿児島市の鴨池ニュータウンを「知っている人」37%、「知らなかった人」55%、鹿児島市の市電の色の変化について、73%の人が「時々色が変わることを気にしている」という数字はこのことをよく示していると思う。しかし、地域以外のこととなると、関心は極端に減

少する。「公共の色彩を考える会」についてはわずかに7人(10%)しか知らなかった。この問題の解決は最終的には、法的な規制にまで言及せねばならないが、環境としての色彩を具体的に改革していくこと、特に行政的規制については、「積極的にやってほしい」が31%、「地域を限ってやるならよい」が29%と、「賛成」が半数以上を占めた。これについては、なかなか難しい問題を多く含み、実現は困難であろうが、徐々に問題を提案し、議論を煮詰めていく土壌はあるように思った。この項、全体に思っていたよりも関心が高かったのに驚いた。

●表33 色彩を学ぶことは必要だと思うか



●表34 (色彩を学ぶことが必要の) 理由

a 強く思う

色自体の力

- ・情操、情感の滋養に影響を及ぼすから
- ・精神に影響を及ぼすから、精神浄化に関わりあるように思う
- ・色は表現であり、言葉であるので、色彩について深く学べば、社会生活でのコミュニケーション、人間性の広がりに関与する
- ・色彩によって感情の機微に触れる
- ・感覚だけでなく、基礎が必要であるから
- ・美術やその他の作品づくりに関連して
- ・美術は全てが色だから
- ・編物作品を作るときに必要
- ・描く絵をよいものにするため
- ・デザインする人には必要

個人のため

- ・自己表現に必要
- ・感覚を磨くことになるから。でもセンスがあるかないかを決めるのはその時代の流行みたいなものだから、自己満足のためかも知れない。
- ・望ましいもの、理想的なもの、普遍的に美しいものを一通り教え、バランスのとれた感覚を育てる。
- ・日常生活の中に自分らしさを1番だしているのが色彩感覚のような気がする。学ぶことによって自分の色を見つけられたらよいと思う。

生活に役立つ

- ・生活の中で切り放せないものだから
- ・生活のさまざまな場面で役に立つものだから (家具、着るもの、住居、間取りなど)
- ・生活を豊かにするから
- ・色彩の調和を考えることは、生活全体に関わること
- ・子供の食欲をそそるために、彩り豊かに盛りつけたほうがよいと思うから。また、弁当箱を開けたときの感激は色次第だと思うから

社会、環境の改革

- ・人間の住むところ全体が美しくなるから
- ・心地よく、住みよい、心安らぐ環境を作り出すため
- ・身の回りの余りに不調和な色使いを見ていると社会全体が不勉強なのではと感じます。少しは町並みの印象も変わってくると思います。
- ・外国の都市計画を知ったので
- ・地域社会や国の文化が高まるから
- ・指導者によって、色彩感覚的に整った環境がつくりだされ、それが住民一人一人に影響を及ぼし、美しい社会の育成につながっていくだろう。平気で捨てられるゴミ、無造作に貼られた壁や電柱、電話ボックスなどの貼紙もなくなるだろう。

その他

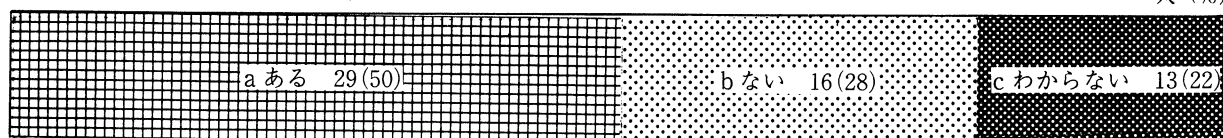
- ・幸せなことに目が見え、色盲でないため、色から受ける感動が自然の中、周囲にあふれるほどあったのに今まで意識せず受け入れるのみだったことに反省して。

●表35 過去に受けた色彩教育 a 不満足の原因

	満足	普通	不満足	
幼稚園	2	12	5	・教育を受けた覚えはない（幼稚園から大学まで全部に共通）
小学校	4	32	19	・人の顔は肌色、空は青、という感じ（幼稚園）
中学校	1	14	4	・図工というと写生ばかりだった（小学校）
高校	1	12	2	・年1, 2回しか絵を描かなかった（中学校）
大学	1	8	0	・ひととおりの色の組合せを教わっただけで、具体的に習っていない（中学校）
合計	7	78	31	・実習ばかりで理論を覚えていない（中学校、高校）
				・色環、色の性質、調和する色、しない色を習った
				・中学校の時、全部に灰色を混ぜなさいと言われた（中学校）
				・内容は楽しかったが、1年間しかなくて残念でした
				・基礎練習と油絵程度だった（大学）
				・戦後で教育がなかった（学校教育全部）
				・色彩をできる教師がいなかった（同上）
				・旧制中学3年の時が昭和20年で、当時は色彩について特に何かを教えられた覚えがない。身の回りは国防色かねずみ色

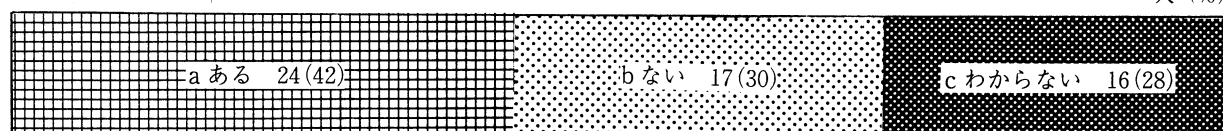
●表36 色名（系統色名）を教わったことがあるか

人 (%)



●表37 水彩の混色は教わったか

人 (%)



●表38 あなたの色彩感覚は、いつどのようにつくられましたか

a 小学校時代、それ以前

- ・幼児時代、色紙、おもちゃ、クレヨン、透明水彩を学習しているとき
- ・小学校卒業までは、母親の与えた衣服や周囲にある家具、その他から自然に体得したように思います。
- ・小学校の頃絵画教室で（自由気ままに楽しんで描いていた）
- ・幼い頃、母の影響で、母のファッション感覚から
- ・小中学校の頃美術教師に指導を受ける
- ・幼稚園にはいる頃、家で良くやった落書きをクレヨンでやったことで作られたと思う
- ・母親の着せてくれる洋服や料理の盛りつけ、色がみ遊びなど、成長と共に自然と
- ・2～3歳の頃、幼児の頃だと思う。母親がローズのくすんだものが好きでセーターもブラウスもそれを着せられ、私自身は「みずあさぎ」の方が好きだったことを覚えている。4～5歳になったときに、美術館の絵はがきを100枚ほど送ってもらった。それを毎日見て暮らした
- ・絵は5歳の頃から描いており、油絵を小学1年生から描いており、自分で色を作り出すのが楽しく、遊びながら絵を描く中で、色彩の知識・感覚が出来上がったように思う。10年前から始めた革工芸は、植物性染料や媒染液を使い、ある程度色彩計画を立てて始める色の勉強であった。

b 中学校時代

- ・中3の頃、担任が美術の先生でよくほめてくれた。卒業して絵画教室で油絵を習い始めたその頃
- ・知識は中学時代、色彩感覚は生まれながらに持っているもの
- ・中学の頃、マリーローランサンの絵から
- ・色彩についての基本的なことは中学時代に習ったような気がする。その頃から洋服に気を遣うようになった

c 高校時代

- ・高校の時、本から

d 大学時代

- ・短大の頃、一流のファッションショウを見て
- ・大学に入って美術部に入ってから
- ・知識は美術の短大から

e 社会人になってから

- ・教員になって、教える（図工時間）必要上、教材研究するうちに、不十分だけれどもその知識や感覚が作られたのではないか
- ・出版社、広告代理店に勤務して以来少しずつ。仕事柄絵を見に行くようになった
- ・デザインの仕事を始めた20～24歳の頃
- ・京都で染色を始めてから、色を意識して独学やその他できるだけ良いものを、美術館や画廊を巡り、また高級工芸品売り場、高級婦人服売り場などを見て回りました。特に、歩く人の服装にも留意しました
- ・人の目に触れる仕事をするようになってから
- ・編物を始めてから。殆ど教科書の独習でやった

f その他

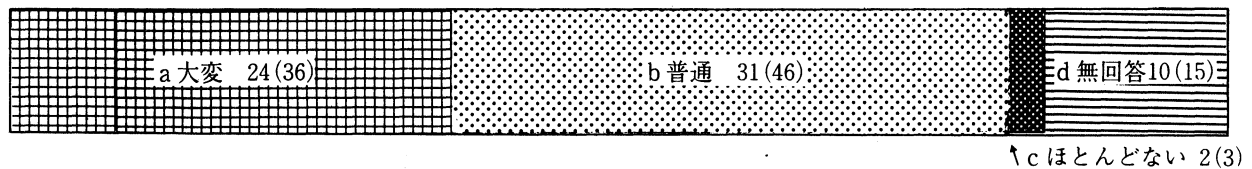
- ・生まれ育った風土。自然の色
- ・いつの間にか自然に
- ・昭和44年日本色研の講習会で
- ・カラーテレビができた頃

- ・この講座が初めて
- ・生活環境が、物心両面豊かで初めて作られるのではないかと些か悲しい考えを持っている。
- ・色彩の知識を積極的に考え始めたのは絵を習い始めた定年（60）後だと思う。色彩感覚は幼少の頃より社会環境から作られた。

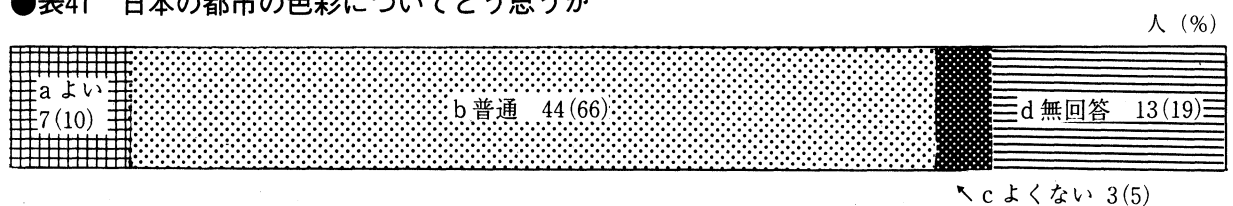
●表39 日常生活で色彩のことを知らなくて困ったことがありますか。あればどんな時ですか

- ・教科指導の時
- ・洋服の色の組合せ（コーディネート）がちぐはぐになってしまった。
- ・数少ない衣服の組合せを部屋の中の照明だけで判断して外に出て、余りにも場違いな色に見えて恥ずかしい思いをした。
- ・花をいけるとき
- ・室内のインテリアのコーディネートの時
- ・子供の弁当の彩りを考えるとき
- ・油絵を描くとき
- ・粘土工芸をやっていて、注文どおりのイメージで作るのに悪戦苦闘した。
- ・人に贈物をするとき
- ・テレビ画面デザインの仕事
- ・デザインの仕事についてたとき、専門用語を知らなくて。

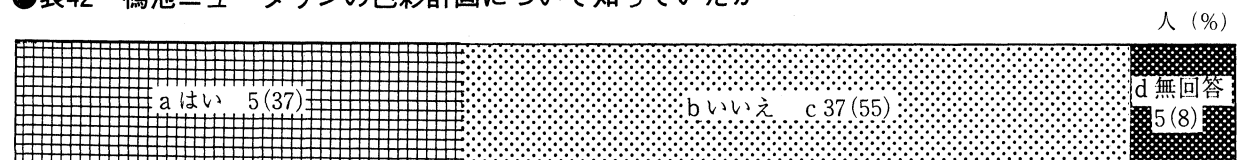
●表40 日頃、色について気を付けるほうか



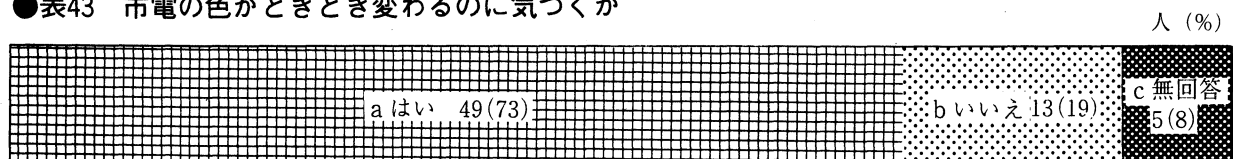
●表41 日本の都市の色彩についてどう思うか



●表42 鴨池ニュータウンの色彩計画について知っていたか

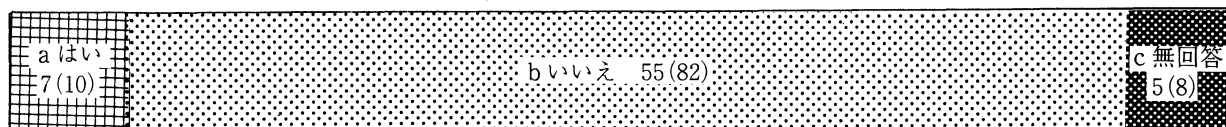


●表43 市電の色がときどき変わるのに気づくか



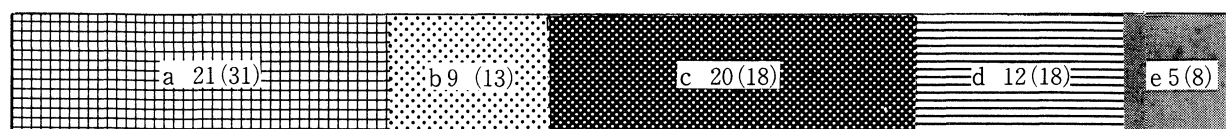
●表44 「公共の色彩を考える会」を知っているか

人 (%)



●表45 行政によって、色彩の規則を設けることについてどう思うか

人 (%)



a 今のように野放しなのは困るから、積極的にやってほしい

d その他

b 表現の自由であり、色は規制できない

e 無回答

c 地域を限ってやるならよい

4 ま と め

- ① 生涯教育、生涯学習は理念が先行し、実践が伴わないと批判されるが、学校教育と違い、教師は一方的に教育者ではなく、生徒が同時に教師になるので、教育という現象が有機的なコミュニケーションを作るような共同体または社会をつくることが重要である。そのためには、初めはやはり個人的な努力つまり地域のような狭いところでのコミュニティー作りから始めなければならない。それは、ちょうど発展途上国の開発と似ている。
- ② 大学の生涯教育の役割、または大学教育の再生の問題。大学は今、「消費される大学」(『現代思想』1989. 7)である。このことを、積極的な意味合いで解釈実践していく必然性のようなものを感じるが如何なものか。だから、生涯学習における大学の役割は、単なる成人の継続的学習のための教育サービスの地域コミュニティーへの解放だけではなく、「学習社会」(ハッチンズ)の中の大学とは、コミュニティーの政治的主権者である自治的市民の継続的リベラル・エデュケーション(非専門的・非職業主義的総合教養教育)を担当することによって、コミュニティーの基盤を支えるという重要な機能が課題とされている。
- ③ 生涯学習にとって美術または美術教育は重要であるということ。そのための戦略もすでに遅いとも言える時期にさしかかったという認識。下から上にいく教育が筋であるが、上から下への教育が緊急であるため、より総合的な対応が必要であること。
- ④ その内容において、基礎基本と応用の問題を整理しておくこと。学習者は、すでに様々なことを経験しており、学校でやるような基礎から応用へという単純な順序は無意味であること。楽しく、しかも充実した自己実現が得られることが必要であり、しかし自己教育としての生涯学習を支える、輝く内容が含まれること。そして、それが単に個人の死によって完結するような狭い意味での教育であってはならず、人間のカルマによって継続され、人類という視野が必ず必要であること。(色彩教育いえば、環境教育として色彩教育を考えることなど)

註

- 1) ～2) 熊田藤作『造形ニュース 308』第34巻8号 開隆堂 1989年 1頁
- 3) 瀬沼克彰『生涯教育の構図』大明堂 1982年 2頁
- 4) ポール・ラングラン 波多野完治訳『生涯教育入門 第1部』財団法人全日本社会教育連合会 1984年 49頁
- 5) 岡本包治・山本恒夫編『生涯教育対策実践シリーズ1 生涯教育とは何か』ぎょうせい 1985年 17～19頁
- 6) ～7) 3) 前掲書 70頁

参考文献

- 1) 岡本他編『生涯教育実践シリーズ4・5』ぎょうせい 1985年
- 2) 波多野完治『生涯教育論』小学館 1972年
- 3) 石堂豊『生涯学習実践講座1・2・4』亜紀書房 1988年
- 4) 住岡英毅『生涯教育の人間関係』アカデミア出版 1985年
- 5) 市川昭午『改訂 生涯学習の理論と構造』教育開発研究所 1985年